

# 私たちの体験を知ったあなたが次の世代につないでくれることを願ってやみません



1944(昭和19)年撮影の集合写真。野田貞夫校長先生をはじめ22名が戦死した。(写真提供 ひめゆり平和祈念資料館)

## ひめゆり学徒隊 平和への祈り 沖縄戦から65年

# 少女たちの戦場

1941年(昭和16年)頃から、戦争の影響が色濃くなり、生徒達は戦争への道を歩むこととなります。お国のために命を捧げるのは当然、靖国神社に祀られることは最高の栄誉であると教えられました。

アジア・太平洋戦争が勃発すると、生徒たちも急速に「軍国少女」へと変わっていき、体育の授業では竹槍訓練やなぎなたの指導を受け、いざというときのための防空訓練、統制をとるための関係兵分列訓練などが行われました。

沖縄が戦場になるのは必至となった頃から陣地構築が急ピッチで進められるようになり、生徒たちも飛行場の整備、拡張や高射砲陣地作り、防空壕掘りなどに従事しました。女子生徒を看護要員として訓練する方針を軍が決定し、学校内での看護教育が行われていきました。

ひめゆり学徒隊は、那覇市の南東5キロにある南風原の沖縄陸軍病院に配属されました。学徒の仕事は、負傷兵の看護、水くみや食事の運搬、伝令、死体埋葬などでした。

6月18日夜、陸軍病院では解散命令が言い渡されました。学徒隊は解散し、生徒たちは自らの判断で行動せよという命令を受けました。解散命令を受け、学徒たちは行く当てもなく山城丘陵から海岸へと向かい、その途中で多くの学徒が命を落としていきました。動員から解散までの90日間の犠牲者19名に対して、解散命令

病院となった壕(写真提供 ひめゆり平和祈念資料館)。沖縄県には人工的に掘られた壕も数多く点在しているが、國吉英則さん(沖縄県南風原町)によると、自然の穴「ガマ」が多く、沖縄戦の時には避難場所として、また集団自決の場所ともなった。

後のわずかな日でも100名余りが亡くなりました。そして沖縄戦が終わってしばらくしても、家族の元にもどらず、生き残っているのか亡くなっているのかさえない学友が多くなりました。そのような学徒の遺族にとつて、娘の死を認めることは難しいことでした。戦後何年経っても、いつ娘が帰ってきてほしいように、家に鍵をかけたままに過ごした遺族もいました。

# 若い世代に知ってほしい

元ひめゆり学徒隊の島袋淑子さんが講演

元ひめゆり学徒隊の島袋淑子さん(82)の講演会が7月10日、千曲市の長野県立歴史館で行われました。島袋さんは、講演会で自らの体験を基に、若い人たちに戦争は二度と繰り返してはならない、戦争は止められない、戦争は止められない、命を大切にしたいと3つのことを話しました。

「戦争は二度と繰り返してはならない。戦争とは人間が起す最大の過ちだからです」と話し、



【しまぶくろ・よしこ】

1928年、沖縄県本部町に生まれる。45年3月23日に沖縄陸軍病院に動員され、ひめゆり学徒隊に配属。終戦後、自らの体験談をもとに、ひめゆり平和祈念資料館や全国各地で講演を行う。ひめゆり平和祈念資料館副館長を務める。

それを戦争を体験したことがない世代の人たちに知ってほしい、と言います。そして「戦争は突然やってくるものではなく、長い準備期間がある。戦争を起こそうとする人たちはあらゆる手段で戦争のルールを敷いてきます。戦争の準備が始まったら止めることはできません。平和なときこそ止められます。どんな小さなことでも戦争に繋がる

また、「戦争を体験したことがないから分らないことかもしれないけど、日本の犯した過ちを分かってほしい。沖縄戦は沖縄だけの問題ではなく、日本全体の問題なんです」と、目に涙を浮かべて話してくださいました。

## ひめゆりの由来

併置校になる前、沖縄

師範学校女子部・県立第一高等女学校にはそれぞれ『百合』、『乙姫』という校友会誌がありました。併置校になった後、両校の併置によって、校友会誌が統合され『ひめゆり』となりました。

## 沖縄戦に動員された女子学徒隊

	沖縄師範学校女子部	県立第一高等女学校
学徒隊の戦後通称	ひめゆり学徒隊	
動員された年月日	1945.3.23	
動員数	専攻科 1名	4年生 38名
	本科 計96名 本予科 計60名 合計 157名	3年生 27名 合計 65名
学徒隊の犠牲者数	81名	42名
引率者の状況	教師 10名	教師 8名
動員された部隊	沖縄陸軍病院(通称:球18803部隊)	
配偶された場所	沖縄陸軍病院(本部・第一・第二 など)	

## 「みんなにも伝えたい」

島袋さんは沖縄戦や陸軍病院で体験したことや、戦争を体験したことのない若い世代の人たちに伝えたいことを話してくれました。

講演を聞く前は沖縄戦やひめゆり学徒隊について全く知らなかったし、考えたこともありません。でも講演を聞いて自分たちと同じくらいの年の人たちが戦争を体験していたり、傷ついた兵士の看病をしたりしていたというのを知り、戦争について考えるようになった。

私たちが戦争について学び始めたのは、新聞作りがきっかけでした。この新聞をきっかけに、いろいろな人たちにも知ってもらいたいと思います。私たちに関係のないことかもしれませんが、戦争に巻き込まれる可能性はいつでもあると思います。これからの日本について、平和について、日本中で考えていくべきです。